

觀經疏書下文

〈凡例〉

- (一) 本訓読は、「義山校訂本」(元禄七年刊・大正大学蔵)を底本とし、「義山校訂本」(享保二十一年刊・蓮勝寺蔵)、「良仰校訂本」(元禄六年刊・蓮勝寺蔵)等を参照した。
- (二) 漢字表記は、平易を旨とし可能なものは常用漢字に改めた。

観經玄義分卷第一

沙門善導集記

まず大衆を勸めて願を發して三宝に歸せしむ。

道俗の時衆等各無上の心を發せ。

生死はなはだ厭い難く、

ともに金剛の志を發して、

弥陀界に入らんと願じて、

世尊、我れ、一心に、

法性真如海と、

一一の菩薩身と、

莊嚴とおよび變化と、

仏法また欣い難し。

横超に四流を断ずべし。

歸依合掌して礼したてまつれ。

尽十方の

報化等の諸仏と、

眷属等の無量なると、

十地と三賢との海と、

時劫じこうの満まんと未満みまんと、

正使しょうしの尽じんと未尽みじんと、

功用くゆうと無功用むくゆうと、

妙覺みょうかくとおよび等覺とうかくの

相応そうおう一念いちねんの後の、

我等われらことごとく、

無礙むげ神通力じんずうりきをもつて、

我等われらことごとく、

仏ほとけの大悲心だいひしんを学がくして、

請ねがい願ねがわくは遙はるかに加備かびしたまえ。

我等われら愚痴ぐちの身しん、

今いま、釈迦しやくか仏ぶつの、

弥陀みだの本誓願ほんせいがん、

定散等じやうさんびとしく回向えこうして、

我われ、菩薩藏ぼさつぞう、

偈げを説といて、三寶さんぼうに帰きして、

智行ちぎやうの円えんと未円みえんと、

習氣じゆけの亡もうと未亡みもうと、

証智じやうちと未証智みじやうちと、

正受金剛心じやうじゆこんごうしんと、

果徳涅槃かとくねはんの者ものとに、歸命きみょうしたてまつる。

三仏菩提さんぶつぼだいの尊そんに歸命きみょうしたてまつる。

冥加みやうがして願ねがわくは摂受しやうじゆしたまえ。

三乘等さんじやうとうの賢聖げんじやうの、

長時じやうじに退たいすること無なき者ひとに、歸命きみょうしたてまつる。

念念ねんねんに諸仏しよぶつを見みたてまつらん。

曠劫かうかうより來こた流轉りうてんして、

末法まうぽうの遺跡ゆいしやくたる、

極樂ごくらくの要門やうもんに逢あえり。

速すみやかに無生むしやうの身しんを証じやうせん。

頓教とんぎやう一乘いちじやう海かいに依よつて、

仏心ぶつしんと相応そうおうせん。

十方恒沙仏、

今、二尊の教に乗じて、

願わくはこの功德を以て、

同じく菩提心を発して、

六通をもつて、我れを照知したまえ。

広く淨土の門を開かん。

平等に一切に施し、

安樂國に往生せん。

玄義(七門料簡)

序題門

この『觀經』一部の内、まず七門を作して料簡し、然して後、文に依りて義を釈せん。第一にまず序題を標し、第二に次にその名を釈し、第三に文に依つて義を釈し、並びに宗旨の不同、教の大小を弁ず。第四に正しく説人の差別を顯し、第五に定散の二善に、通別、異有ることを料簡し、第六に經論の相違を和会し、広く問答を施して疑情を釈去す。第七に韋提、仏の正説を聞いて、益を得る分齊を料簡す。

第一に、まず序題を標すとは、窃かに以れば、真如廣大にして、五乘もその辺を測らず。法性深高にして、十聖もその際を窮むること莫し。真如の体量と量性とは、蠢蠢の心を出でず。法性の無辺と辺とは、すなわち元より来た不動なり。無塵の法界は、凡聖齊しく円かに、兩垢の如如は、すなわち普く含識を該ねたり。恒沙の功德、寂用湛然なり。ただし以るに、垢障覆うこと深ければ、淨體顯照するに由し無し。故に大悲をして西化を隠し、驚きて火宅の門に入り、甘露を灑いで群萌を潤

し、智炬を輝かして、すなわち重昏を永夜に朗らかならしむ。三檀等しく備え、四摂
齊しく収めて、長劫の苦因を開示し、永生の樂果に悟入せしむ。群迷の性隔たり、
樂欲同じからざることを謂わず。一実の機無しといえども、等しく五乗の用有り。慈
雲を三界に布き、法雨を大悲に注がしむることを致す。等しく塵勞を治し、普く未聞
の益に沾わずということ莫し。菩提の種子、これに藉りて以て心を抽んで、正覺の
芽、念念にこれに因つて增長す。心に依つて勝行を起すに、門、八万四千に余れり。
漸頓すなわち各所宜に称うをもつて、縁に随う者、すなわち皆解脱を蒙る。然るに
衆生、障り重くして、悟りを取る者明らめ難し。教益多門なるべしといえども、凡惑
徧攬するに由し無し。たまたま韋提、請を致して、我れ、今安樂に往生せんと樂欲
す。ただ願わくは如来、我れに思惟を教えたまえ、我れに正受を教えたまえというに
因つて、しかも娑婆の化主は、その請に因るが故に、すなわち広く淨土の要門を開
き、安樂の能人は、別意の弘願を顕彰したまう。その要門とは、すなわちこの『觀經』
の、定散二門これなり。定はすなわち慮を息めて以て心を凝し、散はすなわち悪を廢
して以て善を修す。この二行を回して、往生を求願す。弘願というは、『大經』に説く
がごとし。一切善惡の凡夫、生ずることを得ることは、皆阿彌陀仏の大願業力に乗じ
て、増上縁とせずということ莫し。また仏の密意弘深なり、教門曉らめ難し。三賢

十聖も、測つて闕う所にあらず。いわんや我が信外の輕毛なる、あえて旨趣を知らんや。仰ぎ惟れば、釈迦はこの方より發遣し、弥陀はすなわちかの国より來迎したまう。かしこに喚び、ここに遣る、あに去らざるべけんや。ただ勤心に法を奉つて畢命を期とし、この穢身を捨てて、すなわちかの法性の常樂を証すべし。これすなわち略して序題を標し竟んぬ。

第二に、次に名を釈すとは、『經』に言く、「『仏說無量壽觀經』一卷」。「仏」と言は、すなわちこれ西國の正音なり。この土には覺と名づく。自覺覺他、覺行窮満にせしめて、これを名づけて仏とす。自覺と言は、凡夫に簡異す。これ聲聞に由る。狭劣にしてただ能く自利のみあつて、闕いて利他の大悲無きが故に。覺他と言は、二乘に簡異す。これ菩薩に由る。智有るが故に能く自利し、悲有るが故に能く他を利す。常に能く悲智双へ行じて、有無に著せず。覺行窮満と言は、菩薩に簡異す。これ如来に由る。智行すでに窮まり、時劫すでに満ちて、三位を出過す。故に名づけて「仏」とす。「説」と言は、口音に陳唱す。故に名づけて「説」とす。また如来、機に對して法を説きたまふこと多種不同なり。漸頓宜しきに隨ひ、隱彰異有り。あるいは六根通じて説きたまふ、相好もまた然なり。念に應じ縁に隨ひて、皆証益を蒙る。「無量壽」と言は、すなわちこれ、この地の漢音なり。南無阿彌陀仏と言は、またこれ

西国さいこくの正音しょうおんなり。また南なはこれ帰き、無むはこれ命みょう、阿あはこれ無む、弥みはこれ量りょう、陀だはこれ
寿じゆ、仏ぶつはこれ覺かくなり。故ゆえに帰命きみょう無量むりやう壽覺じゆかくと言いう。これすなわち梵漢ぼんかん相對さうたいするに、そ
の義ぎかくのごとし。今いま、無量むりやう壽じゆと言いうはこれ法ほう、覺かくとはこれ人にん、人法にんぼう並ならべ彰あす。故ゆえに
阿彌陀あみだ佛ぶつと名なづく。また人法にんぼうと言いうは、これ所觀しよかんの境きやう、すなわちその二ふた有あり。一ひとには
依報えほう、二ふたには正報しょうほうなり。依報えほうの中なかに就ついて、すなわちその三みつ有あり。一ひとには地下じげの莊
嚴ごん、すなわち一切いっさいの宝幢ほうどう光明くわうみやうの、互たがひに相あい映發ようほつする等とうこれなり。二ふたには地上じじやうの莊嚴しょうごん、
すなわち一切いっさいの宝地ほうぢ、池林ちりん、宝樓ほうろう、宮閣くわかく等とうこれなり。三みつには虚空こくわうの莊嚴しょうごん、すなわち一
切さいの變化へんげの宝宮ほうくわう、華網けもう、宝雲ほううん、化鳥けちやう、風光ふうくわうの動發どうほつせる声樂しやうがく等とうこれなり。前さきのごとく三
種じゆの差別しやべつ有ありといえども、皆みなこれ弥陀淨國みだじやうこくの、無漏むろ真実しんじつの勝相しやうさうなり。これすなわち
總そうじて依報えほうの莊嚴しょうごんを結成けつじやうす。また依報えほうと言いうは、日觀にっかんより、下華座觀しもけざかんに至いたる已來いらい、總
じて依報えほうを明あかす。この依報えほうの中なかに就ついて、すなわち通有つうあり、別有べつあり。別べつと言いうは、華
座ざの一觀いっかんは、これその別依べつえなり。ただ弥陀みだ佛ぶつに属ぞくす。余よの上かみの六觀ろっかんは、これその通依つうえ
なり。すなわち法界ほふかいの凡聖ぼんじやうに属ぞくす。ただ得生とくしやうの者ものをして、ともに同じく受用じゆゆうせしむ。
故ゆえに通つうと言いう。またこの六むつが中なかに就ついて、すなわち真有しんあり、仮有けあり。仮けと言いうは、す
なわち日想にっそう、水想すいそう、氷想ひやうそう等とう、これその仮依けえなり。これこの界かいの中なかの相似そうじ可か見けんの境きやう相
なるに由よるが故ゆえに。真依しんえと言いうは、すなわち瑠璃地るりぢより、下宝樓觀しもほうろうかんに至いたる已來いらい、これ

その真依なり。これかの国の、真実無漏可見の境相なるに由るが故に。一に正報の中に就いて、またその二有り。一には主莊嚴、すなわち阿弥陀仏これなり。二には聖衆莊嚴、すなわち現にかしこに在す衆、および十方法界より同じく生ぜざる者これなり。またこの正報の中に就いて、また通有り、別有り。別と言うは、すなわち阿弥陀仏これなり。すなわちこの別の中に、また真有り、仮有り。仮正報と言うは、すなわち第八の像觀これなり。觀音勢至等も、またかくのごとし。これ衆生障り重く、染惑処り深きに由つて、仏恐らくはたちまち真容を想せしめば、顕現するに由し無からんことを。故に真像を仮立して、以て心想を住せしめ、かの仏に同じて以て境を証せしむ。故に仮正報と言う。真正報と言うは、すなわち第九の真身觀これなり。これ前の仮正に由つて、ようやく以て乱想を息むるに、心眼開くことを得て、ほほかの方の清淨二報、種種の莊嚴を見て、以て昏惑を除く。障を除くに由るが故に、かの真実の境相を見ることを得。通正報と言うは、すなわち觀音聖衆等已下これなり。向より来た言う所の、通別、真仮は、正しく依正二報を明す。「觀」と言うは、照なり。常に淨信心の手を以て、以て智慧の輝きを持して、かの弥陀の正依等の事を照す。「經」と言うは、經なり。經能く緯を持して、匹丈を成ずることを得て、その丈用有り。經能く法を持して理事相應し、定散、機に隨いて、義、零落せず。能く修趣

宗旨不同門

の者をして、必ず教行の縁因に藉つて、願に乗じて往生して、かの無為の法樂を証せしむ。すでにかの国に生じぬれば、更に畏るる所無く、長時に行を起して、果、菩提を極め、法身常住なること、たとえば虚空のごとし、能くこの益を招く。故に曰いて「經」とす。「一卷」と言うは、この『觀經』一部、兩会の正説なりと言うといえども、総じてこの一を成ず、故に「一卷」と名づく。故に「仏説無量壽觀經」一卷」と言う。これすなわち、その名義を釈し竟んぬ。

三に宗旨の不同、教の大小を弁釈すとは、『維摩經』のごときは、不思議解脱を以て宗とす。『大品經』のごときは、空慧を以て宗とす。この例に非ず。今、この『觀經』は、すなわち觀仏三昧を以て宗とす。また念仏三昧を以て宗とす。一心に回願して、淨土に往生するを体とす。教の大小と言うは、問うて曰く、この『經』は二藏の中には何れの藏に撰し、二教の中には何れの教に収むる。答えて曰く、今、この『觀經』は菩薩藏に収む。頓教の撰なり。

説人差別門

四に説人の差別を弁ずとは、およそ諸經の起説、五種を過ぎず。一には仏の説、二には聖弟子の説、三には天仙の説、四には鬼神の説、五には變化の説なり。今、この『觀經』は、これ仏の自説なり。問うて曰く、仏何れの処に在して説き、何ん人の為に説くや。答えて曰く、仏王宮に在して、韋提等の為に説きたまへり。

五に定散兩門を料簡すとは、すなわちその六有り。一には能請の者を明す、すなわちこれ韋提なり。二には所請の者を明す、すなわちこれ世尊なり。三には能説の者を明す、すなわちこれ如来なり。四には所説を明す、すなわちこれ定散二善の十六觀門なり。五には能為を明す、すなわちこれ如来なり。六には所為を明す、すなわち韋提等これなり。問うて曰く、定散二善は、誰か請を致すに因る。答えて曰く、定善一門は、韋提の致請。散善一門は、これ仏の自説なり。問うて曰く、未審し、定散二善、出でて何れの文に在る。今すでに教備えて虚しからず。何れの機か受くることを得。答えて曰く、解するに二義有り。一には謗法と無信と八難および非人、これ等は受けず。これすなわち朽林碩石にして、生潤の期有るべからず。これ等の衆生は、必ず受化の義無し。これを除いて已外、一心に信樂して往生を求願すれば、上、一形を尽し、下、十念を収む。仏の願力に乗じて、皆往かずということ莫し。これすなわち上の何機得受の義を答し竟んぬ。二に出でて何れの文に在るとは、すなわち通有り、別有り。通というは、すなわち三義の不同有り。何ぞや。一に「韋提白仏、唯願為我広説無憂惱処」よりは、すなわちこれ韋提、心を標して、自ら為に通じて所求を請す。二に「唯願仏日、教我觀於清淨業処」よりは、すなわちこれ韋提、自ら為に通じて去行を請す。三に「世尊光台に國を現ぜし」よりは、すなわちこれ、前の通請の「為

我広説の言を酬う。三義の不同有りといえども、前の通を答じ竟んぬ。別と言うは、すなわち二義有り。一に「韋提白仏、我今樂生極樂世界、弥陀仏所」よりは、すなわちこれ韋提、自ら為に、別して所々を選ぶ。二に「唯願教我思惟、教我正受」よりは、すなわちこれ韋提、自ら為に別行を修せんと請す。二義の不同有りといえども、上の別を答し竟んぬ。これより已下は、次に定散兩門の義を答う。問うて曰く、云何なるをか定善と名づけ、云何なるをか散善と名づく。答えて曰く、日觀より、下三觀に至る已來を、名づけて定善とす。三福九品を名づけて散善とす。問うて曰く、定善の中に何の差別か有る、出でて何れの文にか在る。答えて曰く、何れの文にか出ずとは、『經』に「教我思惟教我正受」と言う、すなわちこれその文なり。差別と言うは、すなわち二義有り。一には謂く思惟、二には謂く正受なり。「思惟」と言うは、すなわちこれ觀の前方便、かの国の依正二報、総別の相を思想す。すなわち地觀の文の中に説いて、「如此想者名為粗見極樂国土」と言えり。すなわち上の「教我思惟」の一句に合す。「正受」と言うは、想心すべて息み、緣慮並び亡じて、三昧と相應するを、名づけて「正受」とす。すなわち地觀の文の中に説いて、「若得三昧見彼國地了了分明」と言えり。すなわち上の「教我正受」の一句に合す。定散、二義の不同有りといえども、総じて上の問を答し竟んぬ。また向來の解は、諸師と同じか

らず。諸師は「思惟」の一句をもつて、用て三福九品を合して、以て散善とす。「正受」の一句を、用て通じて十六觀に合して、以て定善とす。かくのごとき解は、まさに謂うに然らず。何ぞや。『華嚴經』に説くがごとき、「思惟正受は、ただこれ三昧の異名なり」。この地觀の文と同じ。この文を以て証す、あに散善に通ずることを得んや。また向より来た韋提、上には請してただ「教我觀於清淨業處」と言い、次下には、また請して「教我思惟正受」と言う。二請有りといえども、ただこれ定善なり。また散善の文は、すべて請せる處無し、ただこれ仏自ら開きたまえり。次下の散善縁の中に、説いて「亦令未來世一切凡夫」と云える已下、すなわちこれその文なり。六に經論の相違を和会するに、広く問答を施して疑情を釈去すとは、この門の中に就いて、すなわちその六有り。一にはまず諸の法師に就いて、九品の義を解し、二にはすなわち道理を以て來してこれを破し、三には重ねて九品を挙げて、返對してこれを破し、四には文を出して、來し定めて凡夫の爲にして、聖人の爲にせざることを証す。五には別時の意を会通し、六には二乗種不生の義を会通す。

初めに諸師の解と云うは、まず上輩の三人を挙げば、上上と云うは、これ四地より七地に至る已來の菩薩なり。何が故ぞ知ることを得たる。かしこに到りてすなわち無生忍を得るに由るが故に。上中とは、これ初地より四地に至る已來の菩薩なり。

何が故ぞ知ることを得たる。かしこに到つて一小劫を経て、無生忍を得るに由るが故に。上下とは、これ種性以上、初地に至る已來の菩薩なり。何が故ぞ知ることを得たる。かしこに到つて三小劫を経て、始めて初地に入るに由るが故に。この三品の人は、皆これ大乘の聖人の生ずる位なり。次に中輩の三人を挙げば、諸師の云く、中上はこれ三果の人なり。何を以てか知ることを得たる。かしこに到つてすなわち羅漢を得るに由るが故に。中中とは、これ内凡なり。何を以てか知ることを得たる。かしこに到つて須陀洹を得るに由るが故に。中下とは、これ世善の凡夫なり。苦を厭いて生ずることを求む。何を以てか知ることを得たる。かしこに到りて一小劫を経て、羅漢果を得るに由るが故に。この三品は、ただこれ小乗の聖人等なり。下輩の三人は、これ大乘始学の凡夫なり。過の輕重に隨いて、分ちて三品とす。ともに同じく一位にして、往生を求願すという者、いまだ必ずしも然らず。知るべし。

第二にすなわち道理を以て來し破すとは、上に言く初地より七地に至る已來の菩薩なりとは、『華嚴經』に説くがごとき、「初地已上七地已來は、すなわちこれ法性身、變易生身なり。これ等はかつて分段の苦無し。その功用を論ずれば、すでに二大阿僧祇劫を経て福智を双べ修し、人法兩ながら空ず。並びにこれ不可思議なり。神通自在にして轉變無方なり。身、報土に居して、常に報仏の説法を聞き、十方を悲化

して、須臾に徧満す」と。更に何事を憂いてか、すなわち韋提のそれが為に仏を請するに藉りて、安樂国に生ずることを求めんや。この文を以て証するに、諸師の説く所にに錯りに非ずや。上の二を答し竟んぬ。上下とは、上に言ひ、種性より初地に至る已来なりとは、いまだ必ずしも然らず。『経』に説くがごとし。「これ等の菩薩を名づけて不退とす。身、生死に居して、生死に染せられず。鵝鴨の水に在るに、水、湿すこと能わざるがごとし」。『大品経』に説くがごとし、「この位の中の菩薩は、二種の眞の善知識の守護を得るに由るが故に不退なり。何ぞや。一にはこれ十方の諸仏。二にはこれ十方の諸大菩薩。常に三業外に加するを以て、諸の善法に退失有ること無し。故に不退位と名づく。これ等の菩薩、また能く八相成道して、衆生を教化す。その功行を論ずれば、すでに一大阿僧祇劫を経て福智を双々修す」等なり。すでにこの勝徳有り。更に何事を憂いてか、すなわち韋提の請に藉つて生を求めんや。この文を以て証す。故に知んぬ。諸師の判ずる所、還つて錯りを成ず。これ上輩を責め竟んぬ。次に中輩の三人を責めば、諸師云く、中上はこれ三果なりとは、然るにこれ等の人は、三塗永く絶ち、四趣、生ぜず。現在に罪業を造るといへども、必定して來報を招かず。仏説いて言うがごとし、この四果の人は、我れと同じく解脱の牀に坐すと。すでにこの功力有り。更にまた何を憂いてか、すなわち韋提の請に藉つて生路を

求めんや。然るに諸仏の大悲は、苦者においてす。心偏に常没の衆生を愍念す。ここを以て勸めて淨土に帰せしめたまふ。また水に溺れたる人のごときは、急にすべから偏に救うべし。岸上の者をば、何ぞ濟うことを用てせん。この文を以て証す。故に知んぬ。諸師の判ずる所、義、前の錯りに同じ。以下知んぬべし。

第三に重ねて九品を挙げて、返対して破すとは、諸師云く、上品上生の人は、これ四地より七地に至る已来の菩薩なりとは、何が故ぞ、『觀經』に「三種の衆生あり、まさに往生を得べし。何者をか三とす。一にはただ能く戒を持し慈を修す。二には戒を持し慈を修すること能わざれども、ただ能く大乘を讀誦す。三には戒を持し經を讀むこと能わざれども、ただ能く佛法僧等を念ず。この三人、各己業を以て專精に意を勵まし、一日一夜、乃至七日七夜、相續して断えず、各所作の業を回して往生を求願す。命終らんと欲する時、阿弥陀仏、および化仏菩薩大衆、光を放ち手を授けて、彈指の頃のごとくに、すなわちかの国に生ぜしむ」と云えるや。この文を以て証するに、正しくこれ仏世を去りたまいて後の、大乘極善上品の凡夫なり。日数少なしといえども、作業時猛し。何ぞ判じて上聖に同ずることを得ん。然るに四地より七地已来の菩薩は、その功用を論ずるに、不可思議なり。あに一日七日の善、華台授手、迎接に藉りて往生せんや。これすなわち上上を返対し竟んぬ。次に上中を對せば、諸師云

く、これ初地より四地已来の菩薩なりとは、何が故ぞ、『観経』に「必ずしも大乘を受持せず」と云えるや。云何が「不必」と名づくる。あるいは読み読まず、故に「不必」と名づく。ただ「善解」と言つて、いまだその行を論ぜず。また言く、「深く因果を信じて、大乘を謗せず、この善根を以て、往生を回願すれば、命終らんと欲する時、阿弥陀仏、および化仏菩薩大衆、一時に手を授けて、すなわちかの国に生ぜしむ」と。この文を以て証するに、またこれ仏世を去りたまたいで後の、大乘の凡夫なり。行業や弱くして、終時の迎候に異有らしむることを致す。然るに初地より四地已来の菩薩は、その功用を論ずるに、『華嚴経』に説くごとき、すなわちこれ不可思議なり。あに韋提の致請に藉りて、方つて往生を得んや。上中を返対し竟んぬ。次に上下を對せば、諸師云く、これ種性以上より、初地に至る已来の菩薩なりとは、何が故ぞ『観経』に「また因果を信ず」と云えるや。云何なるか「亦信」なる。あるいは信じ、信ぜず、故に名づけて「亦」とす。また言く、「大乘を謗せず、ただ無上道心を発す」と。ただこの一句、以て正業とし、更に余善無し。「この一行を回して、往生を求願す。命終らんと欲する時、阿弥陀仏、および化仏菩薩大衆と、一時に手を授けて、すなわち往生を得せしめたまう」と。この文を以て証するに、ただこれ仏世を去りたまたいで後の、一切の大乘心を発せる衆生なり。行業強からざれば、去時の迎候に異有らしむ

ることを致す。もしこの位の中の菩薩の力勢を論ぜば、十方淨土、意に隨いて往生す。あに韋提そが為に請するに藉つて、仏に勧めて西方極樂國に生ぜしめんや。上下を返対し竟んぬ。すなわちこの三品去時に異有り。云何が異なる。上上は去る時仏、無数の化仏と、一時に手を授け、上中は去る時仏、千の化仏と、一時に手を授け、上下は去る時仏、五百の化仏と、一時に手を授けたまう。ただこれ業に強弱有れば、この差別有らしむることを致すのみ。次に中輩の三人を對せば、諸師云く、中上はこれ小乗の三果なりとは、何が故ぞ『觀經』に「もし衆生有つて、五戒八戒を受持し、諸戒を修行し、五逆を造らず、衆の過患無からんに、命終らんと欲する時、阿弥陀仏、比丘聖衆とともに、光を放ち法を説いてその前に來現したまう。この人見已つて、すなわち往生を得」と云えるや。この文を以て証するに、またこれ仏世を去りたまいて後、小乗戒を持せる凡夫なり、何ぞ小聖ならんや。中中とは、諸師云く、見道已前の内凡とは、何が故ぞ『觀經』に「二日一夜の戒を受持して、往生を回顧するに、命終らんと欲する時、仏を見たてまつりて、すなわち往生を得」と云えるや。この文を以て証するに、あにこれ内凡の人なりと言ふことを得んや。ただこれ仏世を去りたまいて後の無善の凡夫、命延の日夜に小縁のその小戒を授くるに逢遇いて、往生を回顧するに、仏の願力を以て、すなわち生ずることを得。もし小聖を論ぜば、

去ることまた妨げ無し。ただこの『観経』は、仏、凡の為に説きたまえり、聖に于らず。中下とは、諸師云く、小乗の内凡已前の世俗の凡夫、ただ世福を修して出離を求むとは、何が故ぞ『観経』に「もし衆生有つて父母に孝養し、世の仁慈を行せんに、命終らんと欲する時、善知識の為に、かの仏の国土の衆事、四十八願等を説くに遇えり。この人聞き已つて、すなわちかの国に生ず」と云えるや。この文を以て証するに、ただこれ仏法に遇わざるの人なり、孝養を行はずといえども、またいまだ心にしゆつり出離を希求すること有らず。ただこれ臨終に善の勧めて往生せしむるに遇う、この人勧めに因つて回心して、すなわち往生を得。またこの人在世に、自然に孝を行はず、また出離の爲の故に孝道を行するにあらず。次に下輩の三人を対せば、諸師云く、これ等の人は、すなわちこれ大乘始学の凡夫なり、過の軽重に随いて、分つて三品とす。いまだ道位有らざれば、階降を弁じ難しとは、まさに謂うに然らず。何ぞや、この三品の人、仏法、世俗二種の善根有ること無く、ただ作悪を知るのみ。何を以てか知ることを得たる。下上の文に説くがごとし、「ただ五逆と謗法とを作らず、自余の諸悪ことごとく皆つぶさに造つて、慚愧の乃至一念なる有ること無し。命終らんと欲する時、善知識の、爲に大乘を説き、教えて仏を称すること一声せしむるに遇う。その時阿弥陀仏、すなわち化仏菩薩を遣わして、この人を来迎して、すなわち往生を得せ

しめたまう」。ただかくのごときの悪人、目に触れて皆是なり。もし善縁に遇えばすなわち往生を得。もし善に遇わざれば、定んで三塗に入りていまだ出ずべからず。下中とは、この人先に仏戒を受く。受け已りて持せず。すなわち毀破す。また常住僧物、現前僧物を偷み、不浄説法す。乃至、一念慚愧の心有ること無し。命終らんと欲する時、地獄の猛火、一時にともに至つて、現にその前に在り。火を見る時に当りて、すなわち善知識の、為にかの仏の国土の功德を説いて、勧めて往生せしむるに遇えり。この人聞き已りて、すなわち仏を見たてまつり、化に隨いて往生す。初め善に遇わざれば、獄火来迎す。後、善に逢うが故に化仏来迎したまう。これすなわち皆これ弥陀願力の故なり。下下とは、これ等の衆生、不善業たる五逆十悪を作り、諸の不善を具す。この人悪業を以ての故に、定んで地獄に墮して、多劫窮まり無からんに、命終らんと欲する時、善知識の、教えて阿弥陀仏を称せしめ、勧めて往生せしむるに遇えり。この人教えに依つて仏を称し、念に乗じてすなわち生ず。この人も善に遇わざらば、必定して下沈すべし。終りに善に遇うに由つて、七宝来迎す。またこの『観經』の定善、および三輩上下の文意を見るに、すべてこれ仏世を去りたまいて後の、五濁の凡夫なり。ただ縁に遇うに異有るを以て、九品をして差別せしむることを致す。何ぞや、上品の三人は、これ大に遇える凡夫、中品の三人は、これ小に遇える凡夫、

げほん 三人は、これ悪に遇える凡夫なり。悪業を以ての故に、臨終に善に藉りて仏願力に乗じて、すなわち往生を得。かしこに到りて華開いて、まさに始めて発心す。何ぞこれ始学大乘の人と言うことを得んや。もしこの見を作さば、自ら失ち他を悞つ、害を為すことこれはなはだし。今一一に文を出し、証を顕すことを以てすることは、今時の善悪の凡夫をして、同じく九品に沾し、信を生じて疑い無く、仏願力に乗じて、ことごとく生ずることを得せしめんと欲す。

第四に文を出し証を顕すとは、問うて曰く、上来返対の義、云何が知ることを得たる、世尊定んで凡夫の爲にして聖人の爲にせずとは、未審し、ただ人情を以て義に準ずるか、はたまた聖教有つて来証するや。答えて曰く、衆生垢重にして智慧浅近なり。聖意の弘深なる、あにむしろ自ら輒くせん。今者一一にことごとく仏説を取りて、以て明証とせん。この証の中に就いて、すなわちその十句有り。何ぞや。第一に『観經』に云うがごとき、「仏韋提に告げたまわく、我れ今汝が爲に広く衆譬を説かん。また未来世の、一切凡夫の、淨業を修せんと欲する者をして、西方極樂国土に生ずることを得せしめん」というは、これその一の証なり。二に「如来今者未来世の一切衆生の煩惱の賊に害せらるる者の爲に、清淨業を説かん」と言えるは、これその二の証なり。三に「如来今者韋提希、および未来世の一切衆生に、西方極樂世界を觀

せしめん」と言えるは、これその三の証なり。四に「韋提仏に白さく、我れ今仏力に因るが故に、かの国土を見たてまつる。もし仏滅後の諸の衆生等、濁悪不善にして、五苦に逼められん。云何してかまさにかの仏の国土を見たてまつるべき」と言えるは、これその四の証なり。五に日觀の初めに云うがごとき、「仏韋提に告げたまわく、汝および衆生、念を専らにせよ」というより已下、すなわち「一切衆生、生盲に非ざるよりは、有目の徒、日を見よ」というに至る已來は、これその五の証なり。六に地觀の中に説いて言うがごとき、「仏阿難に告げたまわく、汝仏語を持して、未來世の一切衆生の、苦を脱せんと欲する者の爲に、この觀地の法を説け」といえるは、これその六の証なり。七に華座觀の中に説いて言うがごとし、「韋提仏に白さく、我れ仏力に因つて、阿弥陀仏および二菩薩を見たてまつることを得たり。未來の衆生、云何ぞ見たてまつることを得ん」といえるは、これその七の証なり。八に次下の答請の中に説いて言く、「仏韋提に告げたまわく、汝および衆生、かの仏を觀せんと欲せば、まさに想念を起すべし」といえるは、これその八の証なり。九に像觀の中に説いて言うがごとき、「仏韋提に告げたまわく、諸仏如來は、一切衆生の心想の中に入りたまう。この故に汝等心に仏を想する時」といえるは、これその九の証なり。十に九品の

中に、「一に説いて「諸の衆生の爲にす」と言うがごときは、これその十の証なり。上來十句の不同有りといえども、如来この十六觀の法を説きたまうことは、ただ常没の衆生の爲にして、大小の聖に于らずといふことを証明す。この文を以て証するに、あにこれ謬りならんや。

第五に別時意を会通すとは、すなわちその二有り。一に『論』に云く、「もし人あつて多宝仏を念ずるに、すなわち無上菩提において、退墮せざることを得」とは、およそ菩提と言うはすなわちこれ仏果の名、またこれ正報なり。道理として成仏の法は要すべからく万行円に備えて、まさにすなわち剋成すべし。あに念仏の一行を將てせんや。すなわち成ずることを望まん者、この処り有ること無し。いまだ証せずと言ふといえども、万行の中にこれその一行なり。何を以てか知ることを得たる。『華嚴經』に説くがごとき、「功德雲比丘、善財に語つて言く、我れ仏法三昧海の中に於いて、ただ一行を知れり、いわゆる念仏三昧なり」と。この文を以て証するに、あに一行なるに非ずや。これ一行なりといえども、生死の中において、乃至成仏まで永く退没せず、故に不墮と名づく。問うて曰く、もし爾らば、『法華經』に云く、「一たび南無仏と称すれば、皆すでに仏道を成ず」と。また「成仏し竟るべし」。この二文何の差別か有る。

答えて曰く、『論』の中の称仏は、ただ自ら仏果を成せんと欲す。『経』の中の称仏は、九十五種の外道に簡異せんが為なり。然るに外道の中には、すべて称仏の人無し。もし称仏一口すればすなわち仏道の中に在って撰す。故に「已竟」と言う。二に『論』の中に説いて云く、「もし人あつてただ発願に由つて安樂土に生ず」とは、久來通論の家、『論』の意を会せず、錯りて下品下生の十声称仏のこれと相似せるを引き、いまだすなわち生ずることを得ずという。一の金銭の千と成ることを得るがごときは、多日にしてすなわち得。一日にすなわち千と成ることを得るには非ず。十声の称仏も、またまたかくのごとし。ただ遠生の与に因と作る。この故にいまだすなわち生ずることを得ず。道く仏ただ当來の凡夫の為に、悪を捨て仏を称せしめんと欲して、誑言して生ずと道う。実にはいまだ生ずることを得ざるを、名づけて別時意と作すとは、何が故ぞ『阿弥陀経』に云えるや、「仏舍利弗に告げたまわく、もし善男子善女人有つて、阿弥陀仏を説くを聞かば、すなわちまさに名号を執持すること、一日乃至七日一心に生ぜんと願すべし。命終らんと欲する時、阿弥陀仏諸の聖衆と、迎接して往生せしむ」。次下に「十方に各恒河沙等のごときの諸仏、各広長の舌相を出して、徧く三千大千世界に覆いて、誠実の言を説きたまう、汝等衆生、皆この一切諸仏所護念経を信ずべし」と。「護念」と言うは、すなわちこれ上の文の一日乃至七日称

仏の名なり。今すでにこの聖教の、以て明証と為す有り。未審し、今時の一切の行者、知らず、何に意ぞ凡小の論には、すなわち信受を加え、諸仏の誠言をば、返つて妄語とするや。苦しいかな、奈ぞはなはだ能くかくのごとき不忍の言を出すや。然りとはいえども仰ぎ願わくは一切の往生せんと欲する知識等、善く自ら思量せよ、むしろ今世を傷まんや。錯つて仏語を信ずとも、菩薩の論を執じて、以て指南とすべからず。もしこの執に依らば、すなわちこれ自ら失ち他を悞たん。問うて曰く、云何なる起行をか往生を得ずと云うや。答えて曰く、もし往生せんと欲せば、要す行願具足することを須いよ、まさに生ずることを得べし。今この『論』の中には、ただ発願と言つて、行有ることを論ぜず。問うて曰く、何が故ぞ論ぜざる。答えて曰く、乃至一念も、かつていまだ心を措かず、この故に論ぜず。問うて曰く、願行の義、何の差別か有る。答えて曰く、『経』の中に説くがごとし、「ただその行のみ有るは、行すなわち孤にしてまた至る所無し。ただその願のみ有るは、願すなわち虚にして、また至る所無し。要すすべからく願行相い扶けて、所為皆剋すべし」と。この故に今この『論』の中に、ただ発願と言つて、行有ることを論ぜず。この故にいまだすなわち生を得ず、遠生のために因と作るという者、その義実なり。問うて曰く、願の意、云何ぞ、すなわち生ぜずと言う。答えて曰く、他の説いて西方の快樂不可思議なりと言うを聞いて、すな

わち願を作して言く、我れもまた願わくは生ぜんと。この語を道い已つて更に相続せず、故に願と名づく。今この『觀經』の中の、十声の称仏は、すなわち十願十行有つて具足す。云何が具足する。「南無」と言うは、すなわちこれ歸命、またこれ發願回向の義。「阿彌陀仏」と言うは、すなわちこれその行なり。この義を以ての故、必ず往生を得。また『論』の中の、多宝仏を称して、仏果を求めんが為にするは、すなわちこれ正報なり。下にただ發願して淨土に生ぜんと求むるは、すなわちこれ依報なり。一は正、一は依、あに相似することを得んや。然るに正報は期し難し、一行精なりといえどもいまだ尅せず。依報は求め易けれども、一願の心を以て、いまだ入らざる所なり。然りといえども、譬えば辺方の化に投ずるはすなわち易く、主と為ることとはすなわち難きがごとし。今時の往生を願する者は、並びにこれ一切投化の衆生なり、あに易きに非ずや。ただ能く上一形を尽し、下十念に至るまで、仏願力を以て皆往かずということ莫し、故に易と名づく。これすなわち言を以て義を定むべからず、信を取る者疑いを懐かん。要す聖教を引いて来り明らかに、これを聞かん者をしてまさに能く惑いを遣らしむることを欲す。

第六に二乗種不生の義を会通すとは、問うて曰く、弥陀淨国は、はたこれ報なりや、これ化なりや。答えて曰く、これ報にして化に非ず。云何が知ることを得たる。

『大乘同性經』に説くがごとし、「西方安樂阿彌陀仏は、これ報仏報土なり」と。また『無量壽經』に云く、「法藏比丘、世饒王仏の所に在つて、菩薩道を行じたまいし時、四十八願を發し、一一に願じて言く、もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、我が名号を稱して我が国に生ぜん」と願じて、下十念に至るまで、もし生ぜずんば、正覚を取らじ」と。今すでに成仏したまう、すなわちこれ酬因の身なり。また『觀經』の中の、上輩の三人、命終の時に臨めるに、皆言く、阿彌陀仏および化仏、来てこの人を迎うと。然るに報身化を兼ねて、ともに來つて手を授く、故に名づけて与とす。この文を以て証す、故に知んぬ、これ報なることを。然るに報應の二身は、眼目の異名なり。前翻の報をば應と作し、後翻の應をば報と作す。およそ報と言うは、因行虚しからず、定んで來果を招く。果、因に應ずるを以て、故に名づけて報とす。また三大僧祇に修する所の万行、必定して菩提を應得す。今すでに道、成ず、すなわちこれ応身なり。これすなわち過現の諸仏に、三身を弁立するに、これを除いて已外更に別体無し。たとい無窮の八相、名号、塵沙なるも、剋体して論ずれば、すべて化に歸して撰す。今かの彌陀は、現にこれ報なり。問うて曰く、すでに報と言うは、報身は常住にして永く生滅無し。何が故ぞ『觀音授記經』に「阿彌陀仏また入涅槃の時有り」と説くや。この一義若為が通釈せん。答えて曰く、入不入の義は、ただこれ

諸仏の境界にして、なお三乗浅智の闕う所に非ず、あにいわんや小凡輒く能く知らんや。然りといえども必ず知らんと欲せば、あえて仏經を引いて、以て明証とせん。何ぞや。『大品經』の涅槃非化品の中に説いて云うがごとき、「仏、須菩提に告げたまわく、汝が意において云何。もし化人有つて化人を作す、この化、すこぶる実事にして、空ならざる者有りや不や。須菩提言さく、不なり、世尊。仏、須菩提に告げたまわく、色すなわちこれ化なり、受想行識すなわちこれ化なり、乃至一切種智すなわちこれ化なり。須菩提、仏に白して言さく、世尊、もし世間の法、これ化なり、出世間の法もまたこれ化ならば、いわゆる四念処、四正勤、四如意足、五根、五力、七覚分、八聖道分、三解脱門、仏の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、並びに諸法の果、および賢聖人のいわゆる須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支仏、菩薩摩訶薩、諸仏世尊、この法もまたこれ化なりや不や。仏、須菩提に告げたまわく、一切の法皆これ化なり。この法の中に、声聞法の変化有り、辟支仏法の変化有り、菩薩法の変化有り、諸仏法の変化有り、煩惱法の変化有り、業因縁法の変化有り、この縁を以ての故に、須菩提、一切の法皆これ化なり。須菩提仏に白して言さく、世尊、この諸の煩惱断のいわゆる須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支仏道

の、諸の煩惱習を断ぜるも皆これ変化なりや不や。仏、須菩提に告げたまわく、もし法の生滅の相有るは、皆これ変化なり。須菩提言さく、世尊、何等の法か変化に非ざる。仏の言わく、もし法の無生無滅なる、これ変化に非ず。須菩提言さく、何等かこれ不生不滅にして、変化に非ざる。仏の言わく、無誑相涅槃、この法のみ変化に非ず。世尊、仏自ら説きたまうがごときは、諸法は平等にして、声聞の作に非ず、辟支仏の作に非ず、諸の菩薩摩訶薩の作に非ず、諸仏の作に非ず、有仏のとき無仏のときも、諸法の性は常に空なり、性空はすなわちこれ涅槃なりと。云何ぞ涅槃の一法のみ如化に非ざる。仏、須菩提に告げたまわく、如是如是。諸法は平等にして声聞の作に非ず、乃至性空すなわちこれ涅槃なり。もし新発意の菩薩、この一切の法皆畢竟性空なり、乃至涅槃もまた皆如化なりと聞かば、心すなわち驚怖しなん。この新発意の菩薩の爲の故に、生滅の者は如化、不生不滅の者は如化にあらざると分別するをや。今すでにこの聖教を以て、験らかに知んぬ、弥陀は定んでこれ報なり。たとひ後に涅槃に入るとも、その義妨げ無し。諸の有智の者知るべし。問うて曰く、かの仏および土、すでに報なりと言わば、報法は高妙にして、小聖すら階り難し。垢障の凡夫云何が入ることを得ん。答えて曰く、もし衆生の垢障を論ぜば、実に欣趣し難し。

まさしく仏願に託して、以て強縁と作るに由りて、五乗をして齊しく入らしむることを致す。問うて曰く、もし凡夫小聖生ずることを得と言わば、何が故ぞ天親の『浄土論』に「女人および根缺二乗の種生ぜず」と云える。今かの国の中に現に二乗有り。かくのごときの論教、若為が消釈せん。答えて曰く、子ただその文を誦して、理を闡わず。いわんや加うるに封拙懷迷を以てす、啓悟するに由し無し。今仏教を引いて、以て明証として、汝が疑情を卻けん。何ぞや。すなわち『観經』の下輩の三人これなり。何を以てか知ることを得たる。下品上生に云うがごとき、「あるいは衆生有り、多くの悪法を造つて慚愧有ること無し。かくのごときの愚人、命終らんと欲する時、善知識の、為に大乘を説き、教えて阿弥陀仏を称せしむるに遇えり。仏を称する時に當つて、化仏菩薩、現にその前に在す。金光華蓋、迎えてかの土に還り、華開いて已後、觀音、為に大乘を説きたまう。この人聞き已つてすなわち無上道心を発す」と。問うて曰く、「種」と「心」と何の差別か有る。答えて曰く、ただし以れば便なるを取つて言ふ、義は差別無し。華開く時に當つて、この人、身器清淨にして、まさに法を聞くに堪えたり。また大小を簡ばず、ただ聞くことを得せしむれば、すなわち信を生ず。ここを以て觀音、為に小を説かず、まず為に大を説きたまう。大を聞いて歡喜して、すなわち無上道心を発すを、すなわち大乘の種生すと名づけ、また大乘の心生

ずと名づく。また華開く時に當つて、観音まず為に小乗を説かば、小を聞いて信を生ぜん、すなわち二乗の種生すと名づけ、また二乗の心生すと名づけん。この品すでに爾なれば、下の二もまた然なり。この三品の人は、ともにかしこに在つて発心す。正しく大を聞くに由つて、すなわち大乘の種生す。小を聞かざるに由るが故に、所以に二乗の種生せず。およそ種と言は、すなわちこれその心なり。上来二乗種不生の義を解し竟んぬ。女人および根缺の義は、かしこに無きが故に知るべし。また十方の衆生、小乗の戒行を修して、往生を願ぜん者、一りも妨礙無く、ことごとく往生を得。ただかしこに到つて、まず生果を証す、証し已つてすなわち転じて大に向う。一たび大に転向して以去、更に退して二乗の心を生ぜず、故に二乗種不生と名づく。前の解は不定の始めに就き、後の解は小果の終りに就く。まさに知るべし。

第七に韋提、仏の正説を聞いて、益を得る分齊を料簡すとは、問うて曰く、韋提、すでに忍を得と言ふ。未審し、何れの時か忍を得たる、出でて何れの文にか在る。答えて曰く、韋提の得忍は、出でて第七観の初めに在り。『経』に云く、「仏、韋提に告げたまわく、仏まさに汝が為に苦惱を除く法を分別し解説すべし」と。この語を説きたまう時、無量寿仏、空中に住立し、観音勢至、左右に侍立せり。時に韋提、時におぼして見たてまつることを得て、足を接して礼を作し、歡喜讚歎して、すなわち無生

法忍を得たり。何を以てか知ることを得たる。下の利益分の中に説いて言うがごとし、
「仏身および二菩薩を見たてまつることを得て、心に歡喜を生じ、未曾有なりと歎じて、廓然として大悟して、無生忍を得」と。これ光台の中に国を見たりし時得るには
非ず。問うて曰く、上の文の中に説いて、「かの国土の極妙の樂事を見て、心歡喜するが故に、時に応じてすなわち無生法忍を得」と言う。この一義、云何が通釈せん。答えて曰く、かくのごとき義は、ただこれ世尊、前の別請に酬うとして、利益を挙勸したまえる、方便の由序なり。何を以てか知ることを得たる。次下の文の中に説いて曰く、「諸仏如来に異の方便有つて、汝をして見ることを得せしむ」と。次下の日想、水想、氷想より、乃至十三觀已來を、ことごとく異方便と名づく。衆生をしてこの觀門において、一一に成ずることを得て、かの妙事を見て、心歡喜するが故に、すなわち無生を得せしめんと欲す。これすなわちただこれ如来末代を慈哀して、挙勸して修を励ますことは、積学の者をして遺無く、聖力、冥に加して現益あらしめんと欲するが故なり。

証して曰く、掌に機糸を握る、十有三結。条条、理に順じて、以て玄門に應じ訖んぬ。この義周し、三たび前証を呈す。上來七段の不同有りといえども、すべてこれ文前の玄義なり。經論の相違妨難を料簡するに、一一教を引いて証明す。信ぜん

者ものをしてうたが疑ない無なく求もとめん者ものをしてとどこ滞おり無なからしめんと欲ほつす。まさしに知しるべし。